

悠久の旅人の終着点

きんにく同盟

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて、幻想郷の管理者となる前の八雲紫が一人の青年と旅をした。その旅の中で様々なことを学ぶ彼女。それは今現在の紫を形成するものだった。

時は経ち、冥界では一人の青年に地獄門を展開させて、地獄に引きずり込む算段をしていた。

その青年の名前は藤村朔太郎。

その名前は奇妙にも一致していた。

目次

プログラグ

1

プロローグ

八雲紫は物思いに耽る。「もしあの時……」と呟きながら、寂しげに雰囲気を漂わせる。それはほのかに広がる微かな匂いの花の様に可憐でいて、尚且つ儂い。

そんな主人が珍しく、彼女の式、八雲蘭は声を掛ける。

「意味のない仮定ですよ、紫様」

もしあの時、など過去を振り返る事は妖怪である彼女にとつて全くもつて無意味であるが、長い悠久の時を生きる大妖怪の紫ならばこそ必要であろう。

このマヒヨガの低い窓に足を掛けながら、頭だけを蘭に向けて言う。

「まあいいじゃない。こんな人間っぽい事も……」

頬が少し紅色がかつている。先ほどまで友人である西園寺幽々子と呑んでいた為だ。少し酔いが回っていたからだろうか、紫は逡巡の後に蘭に話し出す。

それは彼女の面白可笑しく、奇妙な経験談。

「蘭、私はね……未来人と旅をしたの」

冥界

ここでは四季映姫が外界の閻魔と珍しく談笑をしていた。

普段から執務ばかりの生活のちよつとした息抜きなのだ。

「ええ、こんな仕事をしていると様々な者が来ますね」

その映姫の言葉を聞き、外界（人間界）の閻魔は重々しく頷く。その姿に違和感を感じた彼女は「どうかしたのですか？」と聞く。

そもそも、閻魔同士で交友はしない。

閻魔が彼女の元に突然来たのだ。

「なあ、今日大閻魔様から勅令が届いたんだ……」

「大閻魔様から？」

大閻魔とは様々な世界の冥界を統括する閻魔直属の上司。その大閻魔の姿を見た者はいない位のシークレット級である。

その秘密のヴェールに包まれた上司からの勅令に映姫は興味を持つ。

「一体、どんな勅令なんですか？」

いつもの彼女ならそんな情報漏洩を促す行為はしない。それだけに大閻魔という者が謎だと言える。

閻魔は恐る恐る語った。

「実は、人間界に地獄門を展開させる・・・」

地獄門の展開、それが示唆する意味は簡単だ。死期がこない大犯罪者や世界を変えてしまう程の者を強制的に地獄に引きづり込む為。

「なんと・・・その対象者とは？」

「へえ・・・それは凄いい人間ですな紫様！」

「フフフ・・・そうでしょう？彼は物凄く聡明だったんだから！」

嬉しそうに話す主人はまるで、恋する乙女だ。

結構聞いた時に蘭はふと思ひ出した。

「ああ！そいえば名前を聞いていませんでしたね。何というのですか？」

「彼の名前はね・・・」

「藤村朔太郎っていうのよ」

「藤村朔太郎だ」

この矛盾を生む一致は大きな渦を生む。それは人間界はおろか幻想郷をも巻き込むだけの規模になるだろう。